

CAMPUS NOW

早稲田大学広報

No. 259
2026/04

特集

Entrepreneurship from Waseda

巻頭インタビュー

Rhetoric AI, Inc. 創業者兼CEO

加藤 崇

TAKASHI KATO



加藤 崇さん

「早稲田にしかない“余白”が、起業家を育てる」

新卒で入行した大手銀行を2年で退職し、ヒト型ロボットを開発するベンチャー企業SCHAFTを創業。同社を米グーグルに売却して世界的な注目を集めた、加藤崇さん。2015年に渡米し、2社目のFractaも100億円以上で売却した連続起業家だ。2024年には、3社目となるRhetoric AI, Inc.を立ち上げた。開発しているのは、テキスト型のAI対話ボット「Happier」だ。

「『Happier』は、ChatGPTのようにユーザーからの質問を待つのではなく、ボットからの自然な問いかけを行うことによって、学校の悩みや就職、転職など、ユーザーの悩みに心理サポートを提供できるように設計しています。近年、政治や社会、学校やSNS空間から、共感を前提にした対話や、正義といった概念が消滅し、閉塞感が増しています。AIの力でユーザーの悩みに寄り添いながら、最終的には人間同士が、各々の立場を超えて対話できる場を再構築したい。それが今回の起業の原動力です」

10代の頃から人間の心理に関心を抱いていた加藤さんは、以前から人の悩みを対話で解決するソフトウェアの開発を模索してきたという。実装方法を探る中で、ChatGPTなど生成AIの急速な発展を受け、「こうした技術を組み合わせることで、イメージが形になる」と確信した。

「母子家庭で育ち、経済的には非常に苦

しかった私ですが、母と姉、3人家族で毎日楽しく、幸せな日々を送ることができた。だからこそ、『誰しものが幸せになる権利があり、誰しものが幸せになることができる』と、心の底から信じていることができます」

技術をビジネスへと昇華させるアントレプレナーとして、社会変革に挑む加藤さん。その素養は「早稲田大学の中でこそ培われた」と、懐かしそうに学生時代を振り返る。

「在学当時のキャンパスは、世間の枠組みにとらわれず、自分の哲学を貫く、個性的な学生で溢れていました。知的でありながら、画一を嫌う反骨。社会の標準に染まらない“余白”のようなものが、早稲田にはあった。この“余白”が、私に挑戦する勇気と知恵を与えてくれたのです」

テクノロジーが世界を席卷する現代。“アントレプレナーシップ(起業家精神)”に不可欠なのは、社会に対する思いと信念だと、加藤さんは語る。

「AIが知識を供給し、ロジックを担う時代に突入しました。いま起業家に必要なのは、『正しいプロセスを踏むこと』ではなく、『何が正しいのかを問う姿勢』です。世間では、何でも良いから会社を作り、お金を儲けることが、起業だと教える向きがある。しかし人や社会を幸せにしない起業には、意味がありません。社会で最も恵まれない人たちを利する挑戦が、早稲田発のアントレプレナーシップだと思っています」



PROFILE

1978年生まれ。2002年早稲田大学理工学部応用物理学科卒業。東京三菱銀行を経て、ヒト型ロボットを開発するSCHAFTを共同創業。2013年に同社を米グーグルに売却し、渡米。人工知能ベンチャーFractaをシリコンバレーで共同創業。2023年に全株を栗田工業に売却。2024年に3社目となるRhetoric AI, Inc.を創業。元スタンフォード大学客員研究員。2019年より東北大学特任教授。ベンチャー創造の記録をnote『越境者ノート』に連載中。



Entrepreneurship from Waseda

早稲田大学では教育、研究、社会貢献の一環として、アントレプレナーシップ※1を備える人材の育成や、本特集に登場するのは、起業や事業開発に挑む学生や卒業生。イノベーションが育まれる、キャンパスの

ベンチャー企業の支援に取り組んでいます。最前線をお伝えします。※2

Innovations

暮らしを変える大学の知

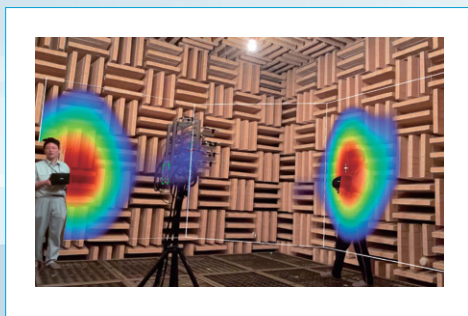
早稲田大学の知をベースに展開される、ベンチャー企業の事業・サービスの一部をご紹介します。

“工学×XR/AI”で音や磁場を可視化

INSPIREI

株式会社INSPIREI

井上敦登さん(基幹理工学研究科修了)がCEOを務めるR&D企業。音響工学を専門とする及川靖広教授(理工学術院)の研究室から誕生した技術で、音や磁場の可視化サービスを展開している。飛鳥建設株式会社と及川研究室の共同開発技術である音響可視化システム「OTOMIRU®」の社会実装を通じ、騒音対策への貢献を目指す。

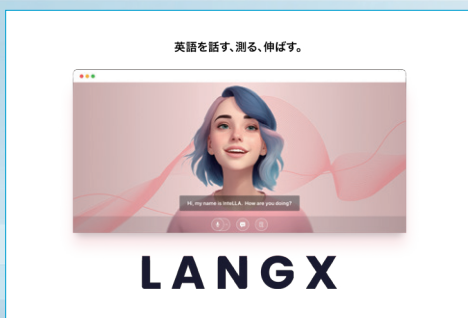


会話AIで英会話学習を支援

EQUHENOPOLIS

株式会社エキュメノポリス

松山洋一客員研究員(研究院客員准教授)が起業したスタートアップ。会話AIを使った英会話能力判定システム「LANGX Speaking」は、早稲田大学などで導入されている。2026年1月には公益財団法人日本英語検定協会とパートナーシップを締結し、次世代のAI英語教育について共同研究を推進している。



ミスマッチを解消する調査分析手法

VETA

Trust Your Choices

VETA株式会社

原健人さん(経済学研究科修了)がCEOを務める社会科学発ベンチャー企業。政治経済学術院の研究成果にもとづいた調査分析手法「Value Elicitation法」で、ユーザーの価値観を引き出すツールを提供する。2026年の衆議院議員選挙では日本経済新聞社のポートマッチに、同社の分析・計算アルゴリズムが採用された。



損傷した膝前十字靭帯を再生

CoreTissue BioEngineering

CoreTissue BioEngineering株式会社

岩崎清隆教授(理工学術院)が創業し、城倉洋二さん(東京女子医科大学・早稲田大学共同大学院博士課程修了)がCEOを務める医療ベンチャー企業。独自の脱細胞化技術により、膝前十字靭帯を再生する組織再生型靭帯を開発中。頻度の高い膝のけがにおいて、アスリートの治療などに貢献する。



体力テストをアプリでデジタル集計

Pestalozzi Technology

Pestalozzi Technology株式会社

井上友綱さん(スポーツ科学部卒業)が設立した、運動データの集計・活用を展開する企業。体力テストのデジタル集計アプリ「ALPHA」は、全国の小・中・高校生の15%にあたる約180万人が活用している。企業向けには従業員の体力チェック集計システム「ALPHA for Biz」を提供し、健康経営や労災予防に貢献する。



※1 本特集では「アントレプレナーシップ」の概念について、起業家およびそれに類する挑戦者として行動を取り、自ら課題を見出しながら価値創造に取り組む姿勢と捉えています。※2 特集内に登場する在学生の学年は取材時(2025年度)のものです。

学生起業家が挑む 音声AIソリューションでの 企業課題解決

基幹理工学部3年

山田凌央 さん (写真右)

企業のコールセンターに向けて
音声AIのソリューションを展開

大学3年の夏、友人の小幡と株式会社ことば侍を設立。代表取締役CEOとして、経営や営業を担当しています。ことば侍が展開するのは、企業におけるコールセンター業務の人手不足を解決する音声AIソリューション「Kotoba.AI」です。お客さまからの問い合わせに対し、AIエージェントが自然な音声で対応します。日本が抱える深刻な人材不足を自分たちの技術力で解決したいと開発しました。

起業に関心を抱いたのは、「GTIE(ジータイ)」*のプログラムへの参加がきっかけです。外国人などの手書き作文をAIで添削する日本語学校向けDXツールを開発し、高い評価を獲得。海外研修への派遣や、ビジネスコンテストでの優勝につながり、自信をつけることができました。

起業の初期段階ではさまざまな方法で営業を行い、学生起業家にもチャンスが広がっていることを実感しました。今後は事業拡大やソリューションの改良に向け、さらなる成長を目指します。

基幹理工学部4年

小幡有生 さん (写真左)

創業者二人の強みを生かし
アイデアの実装に成功

ことば侍のCTOとして、開発を担当しています。Kotoba.AIのような音声AIは、人間の声の検知、顧客企業ごとのオーダー対応など、細かな調整作業が必要です。エンジニアとしてKotoba.AIを改良するのが、私の主な役割になります。

会議などで頻繁に利用するのが、早稲田キャンパスの「アントレプレナーシップセンター」です。施設は起業を志す学生を支援しており、起業家として活躍する先輩たちと交流することで、刺激や知見を得ることもできます。

私が起業を決めたきっかけは、サークルの新歓活動で山田と意気投合したことです。会社では現在、コミュニケーションが得意な山田が営業やプレゼン、テクノロジーを学ぶ私が開発と、得意分野で役割を分担しています。互いの意見を尊重し合いつつ、一人の力では困難も多い起業の道を二人で歩んでいきたいです。

*早稲田大学、東京大学、東京科学大学を主幹機関とする、大学発スタートアップを育てるプラットフォーム。

エンジニアとして技術全般を
担当しています

株式会社ことば侍で
CEOを務めています





アントレプレナーシップセンターの支援を受け
起業しました

全自動ロボット歯ブラシの 大学発スタートアップで 世界進出を目指す

大学院先進理工学研究科
博士後期課程
研究指導終了退学

栄田 源 さん

10年間の研究開発を経て
健康社会に貢献する
プロダクトを展開

博士課程在学中の2018年に設立した株式会社Genicsで、CEOとして活動しています。当社が目指すのは、全ての人々が健康で豊かに過ごし、より多くの時間を創造活動に使える社会です。早稲田大学の研究室時代から注力してきたのが、ロボット歯ブラシの研究でした。現在、口にくわえると全自動で歯磨きをしてくれるロボット「g.eN」を開発し、体の健康と関わる口腔ケアを支援しています。

学部時代に米国へ留学し、チャレンジ精神を身につけた私は、大学院進学後に「WASEDA-EDGE人材育成プログラム」*を受講。起業家や投資家をゲストに迎える授業に感銘を受け、起業への関心が芽生えました。同じ頃、JST(科学技術振興機構)の「大学発新産業創出プログラム(START)」にロボット分野が立ち上がり、研究室で情報を紹介されたため、応募してみることに。g.eNの前身となる口腔

ケアロボットが採択され、本格的に起業に乗り出しました。その後はベンチャーキャピタルの出資を受けながら資金調達を繰り返し、全自動ロボット歯ブラシの研究開発をつづけ、現在はクラウドファンディングで支援を受けて量産化を推進しています。今後は幅広い市場での実用化に向け、販路を拡大していく方針です。

起業当時、大学の研究室発のスタートアップは少ない状況でした。正攻法が確立されていない中、事業化の各プロセスでサポートしてくれたのが、早稲田大学の「アントレプレナーシップセンター」です。登記の際は同所を会社所在地にすることで、早稲田大学発の技術によるスタートアップとして信頼を受けることができました。また、財務などの専門家によるアドバイス、関係者のネットワークなどの支援も、大いに役立ちました。

研究開始から10年の月日を費やしましたが、早稲田のロボット研究室から生まれた世界初の技術は、歯科医や介護の現場から高評価をいただいています。口腔ケアは人間にとって欠かせません。全世界のマーケットを視野に入れながら、“歯磨きの革命”に挑戦していきます。

*文部科学省が実施したグローバルアントレプレナー育成促進事業の一つで、2014年から3年間実施された。

Robotic Healthcare Support

#2

ソーシャルビジネスの ノウハウを育む サークルでの活動

文化構想学部1年

藤本みのりさん

起業プロジェクトを通じた
社会課題解決で学ぶ
ソーシャルビジネスの方法論

石川県出身の私は、高校2年生の時に能登半島地震を経験。大学では能登半島での活動に携わりたいと、「平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)」のボランティアプロジェクト「ソーシャルビジネス起業プロジェクト」で活動しています。

ソーシャルビジネス起業プロジェクトは、ビジネスを通じて社会課題の解決を目指す団体です。1年生の夏には、団体の中でチームを作り、「カーボンニュートラル実現に向けたアイデアコンペティション」に参加しました。同イベントは、東京電力ホールディングス株式会社と早稲田大学が主催する、キャンパスのカーボンニュートラル推進に向けたアクションを企画するアイデアコンペです。私たちは、大学生協の廃棄予定食品を学生会館でセット販売し、フードロス削減やCO₂排出抑制につなげるアイデアを提案

しました。今のところ実装には至っていませんが、将来的には早稲田の商店街とも協働し、まち全体でフードロスを減らしつつ、学生に対して昼食を低価格で提供する取り組みに発展させたいです。一方、マネタイズという視点では不足も多いため、実装可能なビジネスモデルを模索していきたいと思います。ソーシャルビジネス起業プロジェクトではほかにも、能登半島で3回活動するなど、地域と連携した活動に取り組んできました。

また私は、早稲田大学のアントレプレナーシップセンターが株式会社ボーダレス・ジャパンと連携して提供する「W-SEED ソーシャルアントレプレナー育成プログラム」にも参加していました。実際に起業家として活躍する方を講師に招き、ビジネスモデルの設計、マネタイズの技術を学んでいくプログラムです。W-SEEDで学んだのは、「助けたい」対象を明確にすることで、一方的な支援で終わらないモデルを作ることなど、ソーシャルビジネスの基礎でした。今後、コンペでの経験と身につけたマインドを、団体の活動などを通じて、少しずつ実践に移していきたいです。



カーボンニュートラルの
アイデアコンペで入賞しました

サステナブルな農業の経営モデルについて
大学院で研究しています



インターンシップで 実践知を身に付け、 農業経営の研究にアプローチ

大学院人間科学研究科1年

関根章斗 さん

**研究にビジネスの視点を
取り入れるため
長期インターンシップに参加**

大学院に進学後、農業経済学をフィールドに、中山間地域の農業経営について研究しています。人手不足などを背景に、農村では大規模事業者の参入が求められつつあります。一方、棚田が広がる中山間地域のような環境は、大規模経営に不向きだとされてきました。しかし経済合理性が通用しない地域も、食料生産の重要な担い手であり、社会的存在意義は高いといえます。それらの地域が経営を持続させるための条件を探るのが、私の研究テーマです。

農村に関心を抱いたきっかけは、学部時代のサークル活動や授業で、農村地域に滞在したことでした。過疎化をはじめとする構造的課題に対し、学生の立場で解決策を提示するのは困難です。そのため私は、ビジネスの手法で課題を解決できないかと、農業系のスタートアップで

約1年半の長期インターンシップに参加しました。

インターン期間中に担当したのは、農家の方々との調整役やSNS運営などです。創業まもない時期のスタートアップで、起業家として活動する社会人に囲まれながら仕事できたことは、私にとって刺激的でした。その後、スタートアップに関心を高めた私は、彼らを支援する立場も経験したいと、ベンチャーキャピタル「早稲田大学ベンチャーズ株式会社(WUV)」のインターンにも参加。WUVは、学問の知見や研究成果を社会に実装するため、創業投資を行う機関で、私は大学の研究者の活動調査、事業化に向けた課題抽出、成長モデルの算出などを担当し、起業支援の現場で学んでいきました。

学部時代に授業と並行して参加したこれらの経験により、事業化のシビアな視点を得ることができました。身に付けた知見を生かしながら、現在は修士論文の執筆に取り組んでいます。将来は、現場における農業の視点、ビジネスやファイナンスの視点から、農村地域および日本社会全体の課題にアプローチしたいです。

全学オープン科目で 事業開発のマインドを学び ビジネスの現場で実践

スポーツ科学部2年

脇 侑輝 さん

ビジネス・クリエーションコースを受講し
新規事業の創造力を身につける

入学前から起業に興味があり、全学オープン科目の中から、「ビジネスモデル仮説検証」を受講。課題発見に向けたインタビュー、ソリューションの考案、仮説と検証のサイクルを通じ、事業を立ち上げる力を磨きました。福祉や運動に関心があった私は最初、車椅子利用者向け、AIが旅行プランを生成するソリューションを企画。しかし、仮説検証を通じて需要不足を痛感したため、ストレッチボールを活用した尿失禁の予防運動にテーマを変え、授業内で発表しました。授業の課題としてスタートしたビジネスモデルですが、私のゴールは社会実装です。すでにストレッチボールの提供元企業より承諾をいただいております。私が新規顧客へ予防運動を普及する形で、収益化を目指しています。現在は幅広いターゲットに周知すべく、SNSマーケティングの戦略を立てている段階です。また、受講者の代表として、全国のリーンローンチパッド学習者が事業構想を競う「リーンローンチパッド全国大会2026」に出場し、ピッチにも挑戦しました。

一連の活動で身についたのは、仮説と検証を繰り返す、ビジネスの精度を高める力でした。以前は「起業は難しいこと」というイメージを抱いていましたが、着実なステップを踏めば、必ず実現できると感じています。卒業後に起業家として活動するため、在学中は理論の習得や現場での実践を通じ、もっと能力を高めたいです。

リーンローンチパッド全国大会に
出場しました



#5

Assistive Technology

誰かの役に立つものづくりへ。 コンテストへの参加で学んだ、 ニーズ起点の開発プロセス

創造理工学部3年

木 棚 麗 香 さん

「ものプロ・アドバンスト」に参加し
編み図作成アプリを開発

幼い頃からアイデアを形にすることが好きで、創造理工学部の総合機械工学科に進学。研究室では電子回路や図面の作成など、ものづくりのさまざまな技術を学んでいます。

研究活動の一環として、清水建設株式会社と早稲田大学が企画する「WASEDAものづくりプログラム・ADVANCED(ものプロ・アドバンスト)」に参加しました。同プログラムでは、学生が現実の顧客やユーザーの課題を想定し、ソリューションとなるプロダクトを提案・制作します。私は、編み物の設計図である「編み図」を、ユーザーが自らコンピューター上で作成できるアプリを開発しました。

このプロダクトに着眼したのは、私自身が編み物が好きだったからです。編み物では、一般のユーザーが自由に完成形を想像し、事前に編み図を作成していくのは困難です。そこで私は、写真やイラストから3Dデータ上で完成形を作り、そこから自動で編み図が作成されるアプリを考案しました。

ものプロ・アドバンストでは、清水建設の社員の方や早稲田の職員がサポートに入り、技術・資金上の課題について助言してくれます。社会への実装を目指し、ニーズのヒアリングなど、顧客調査にも注力しました。こうしたプロセスで学んだのは、周囲の声を聞くことの面白さです。今後、好きなものづくりを続けていくためにも、誰かに喜んでもらう視点を大切にしたいと思います。

ものプロ・アドバンストで最優秀賞を
獲得しました



#6

Mechanical Engineering

早稲田大学でイノベーションを生み出す人材の教育やベンチャー企業の育成を担うのが、「アントレプレナーシップセンター」です。所長を務める石井裕之教授が、同所の方針と取り組み内容について説明します。

アントレプレナーシップ
センター
所長
理工学術院教授
石井裕之



アントレプレナーシップセンターの詳細はこちらをご覧ください



全ての学生の成長に資する アントレプレナーシップ教育プログラム

アントレプレナーシップセンターの前身となる「早稲田大学インキュベーション推進プロジェクト」は、2001年に発足しました。本学はアントレプレナーシップを「困難を乗り越えて、新しい価値を生み出していく力」と捉えています。この考えを全学的に育成し、挑戦の一步を後押しをするのが、アントレプレナーシップセンターの役割です。

学生に向けた取り組みの中心が、アントレプレナーシップを学ぶ教育プログラムです。社会の中で自分が信じる価値を形にする力は、起業の志望者のみならず、全ての学生に求められます。その経験を早い段階で積めるよう、当センターではオープン科目などを運営する「グローバル・エデュケーション・センター」と連携し、2026年度からは全ての学部生が受講可能な全学副専攻「アントレプレナーシップ」をスタートさせます。「ビジネスクリエーション」や「起業マインド」の科目群によって、事業計画の構想やプロジェクト推進の力を身につけることが可能になります。

授業外での学生の成長を支援する課外活動プログラムとして、「WASEDA ギャップファンド・プロジェクト」では、自身のアイデアや技術で事業化を目指す学生に、試作開発の資金を提供し、仮説検証の機会を創出しています。2025年度からは、プロダクト開発に取り組む清水建設株式会社との連携プログラム「WASEDA ものづくりプログラム・ADVANCED」や、社会起業家の誕生を支える株式会社ボードレス・ジャパンとの提携による「W-SEED ソーシャルアントレプレナー育成プログラム」もスタートし、社会課題を持続可能な形で解決する人材の育成に取り組んでいます。

本格的に起業を志す学生は、アントレプレナーシップセンターに会員登録することで、登記における住所利用、オフィスとしての活用、法務や税務、

労務、特許などのコンサルティングなど、充実したサポートを受けることができます。金融機関やベンチャーキャピタル、潜在顧客、卒業生組織である稲門会などとの連携にも取り組んでおり、ネットワークの力で起業準備や事業成長を前進させられるでしょう。

イノベーションを創出する人材を輩出し 社会の発展に貢献する

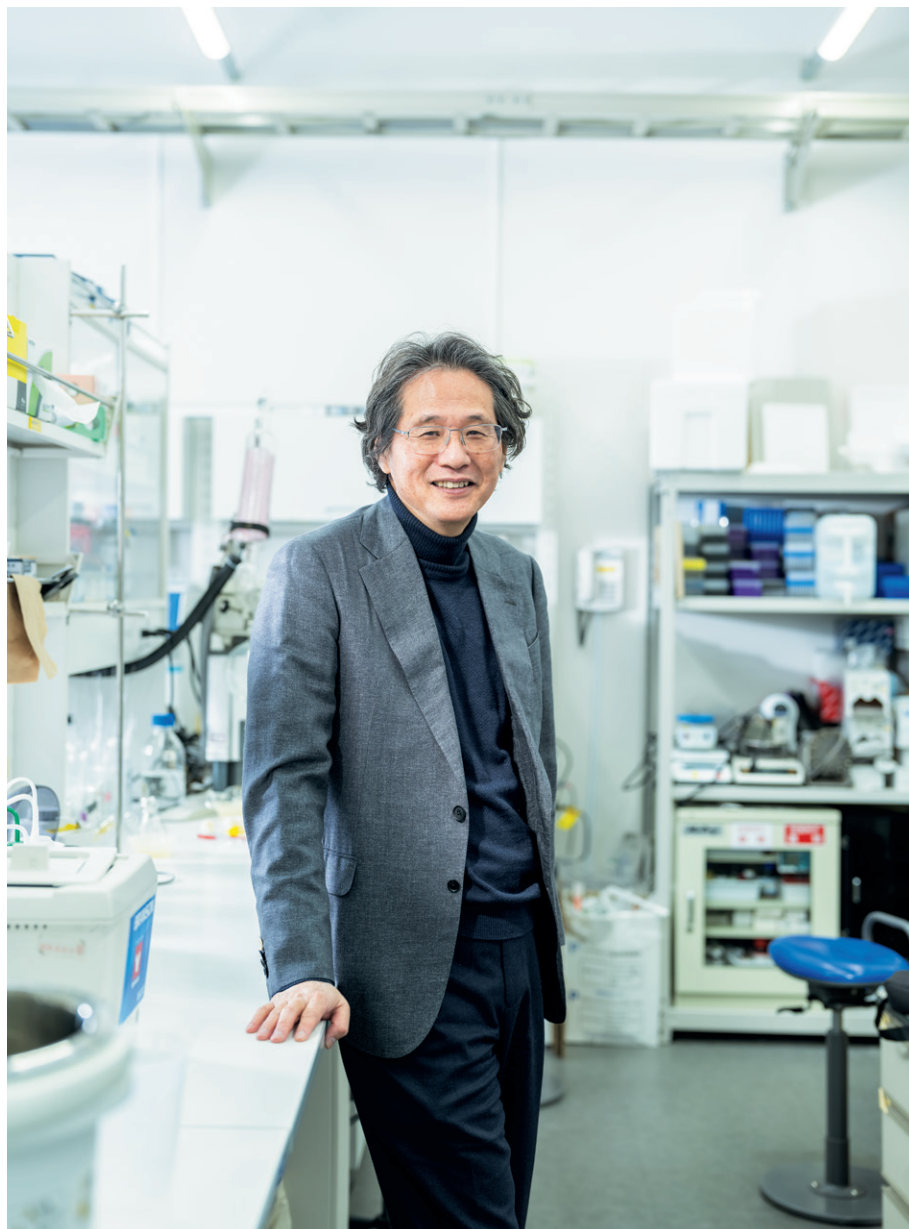
アントレプレナーシップセンターでは、研究者に向けた起業支援も行っています。大学での研究成果を社会で実装する上で、起業は有効な手段です。そのプロセスを支えるべく、ロードマップ作成などを行う専門の事業化アドバイザーを配置。また、ビジネスモデルを構築する上で欠かせない概念実証(PoC)のフェーズでは、「早稲田 PoC ファンドプログラム」として研究開発費を提供することで、初期の仮説検証を支援しています。社会的なインパクトを備える研究者の活動支援は、教育の質向上にもつながるはずです。

社会が活性化する上で、スタートアップは重要な存在です。かつて日本の高度経済成長期には、多くの起業家が産業の発展をリードしました。成熟社会を迎えた現代、新たな価値創造や社会変革をもたらすキーワードはテクノロジーですが、大学は先端技術を生み出す場でもあります。100年、数百年先の未来を見据え、研究者たちが活動するキャンパスに広がるのは、イノベーションの可能性です。こうした環境は、アントレプレナーシップの養成に最大限活用されるべきでしょう。

早稲田大学には、学生や研究者、ベンチャー企業、投資家、専門家が交流する土壌が、着々と築かれています。アントレプレナーシップセンターは今後、このエコシステムを拡張すべく、施策の充実化を図ってまいります。

私たちの暮らしにとって、食と健康は欠かせないキーワードです。海洋生物や発酵食品など、自然に存在するものの“機能”を探求する中尾洋一教授に、研究が生み出す食品の未来を聞きました。

遺伝子のスイッチから食の新たな可能性を切り開く



理工学術院
教授
中尾洋一

東京大学大学院農学系研究科 水産学専攻・博士課程修了。ハワイ大学化学科・博士研究員、東京大学大学院農学生命科学研究科助手、講師を歴任。早稲田大学理工学術院准教授を経て、2012年より現職。2021年、早稲田PoCファンドプログラムでの研究からUssio Lab.株式会社を創業し、同社の取締役役に就任。

遺伝子からのアプローチで機能性の新しい評価軸を確立

自然界に存在する化合物が持つ働きや特性を明らかにする機能性化学の分野を専門としています。元々は、海綿や軟体動物、ホヤなどの海洋生物から、葉の素となる成分を探る研究を行っていました。早稲田大学に所属することになり、新しい研究テーマを模索する中で着目したのが、「食品」の機能性でした。食品の機能性成分というと、一般的にポリフェノールや脂肪酸、ビタミンといった成分が「体にいいもの」として注目されます。海洋生物での研究手法を元に、まだ見ぬ新しい成分を探そうと試みましたが、食品が持つ成分は活性が弱く速効性も低いため、難航していました。

その中で鍵になったのが「遺伝子のスイッチ」です。ES細胞など万能細胞の「遺伝子のスイッチ」をコントロールして分化誘導させた細胞を移植することで、失われた生体機能を回復させる再生医療が、2000年代から注目を集めるようになりました。また、細胞の分化誘導だけではなく、がん化・老化などにも「遺伝子スイッチ」は影響を与えることが明らかになってきました。そこで、日々摂取する食品の中にもこのスイッチを切り替える成分があり、健康維持に影響しているのではないかと考えました。

味噌から塩へ 研究の成果から商品を展開

2014年、農林水産省からの助成を受けた研究プロジェクトを機に、食品の機能性、特に抗ストレスと食品成分をテーマにした研究を開始しました。幹細胞から神経系を形成するニューロンやアストロサイトを分化させる過程に特定の食品成分を添加し、その際に起きる変化を検出することで、健康にいいといわれる発酵食品、とりわけ味噌に含まれる成分を中心に実験を進めていきました。その結果、味噌の発酵過程で生成される物質の中に、うつ病や認知症に関与する「遺伝子スイッチ」を切り替える成分を発見しました。こうした手法をほかの食品にも応用していく中で、

次に注目したのが「塩」です。偶然、瀬戸内海の塩の製品化を目指している方と知り合い、そのおいしさの秘密となる成分の分析を担当しました。山口県牛島は、潮の干満によって一旦海底に浸透した海水が山からの地下水と混ざりあって海底へと湧き出す、海底湧海水が豊富です。この湧水から作られる海底湧水塩は、海水のミネラル成分に加え、山から流れ込んだ有機物やアミノ酸などの栄養素を多く含みます。そのため、塩化ナトリウムを約25%カットできるとともに、塩化ナトリウム99%以上の精製塩に比べてまろやかでほんのりとうま味を感じる味わいとなり、カリウムやカルシウム、マグネシウムも多く含まれています。この研究は、2020年度の「早稲田PoCファンドプログラム」に採択され、2021年には大学発ベンチャー「Ussio Lab.株式会社」として事業化を行いました。現在、海底湧水塩「うっしお」や、それを使った塩焙煎コーヒー、塩ソフトクリーム（うっしおソフト）などの商品展開を進め、塩を使っても錆びないコーヒー焙煎機の開発研究も行っています。こうした偶然の出会いも、社会に還元される研究の醍醐味だと思います。

おいしく減塩が可能な食事ができれば、血圧を気にする人の選択肢が広がります。現在この塩を生かした「生ハム作り」のプロジェクトを進めています。私たちが開発した塩と組み合わせ、年齢や健康状況に関わらず多くの人が食べられる生ハムを作るのが目標です。

「楽しさ」を原動力に 大学と社会を行き来する

私が研究において大切にしているのは、「楽しむこと」です。「美味しいものを食べたい」「これらを組み合わせたら新しい発見がありそう」という想いが全ての活動の原動力です。その過程で、大学の研究と社会課題は自然と結びついていくのだと思います。

国レベルでスタートアップの推進が進み、研究者の力が国全体の経済発展に求められています。学生には、好奇心で始めた研究成果を、社会還元につなげるスタートアップにも果敢にチャレンジしてほしいですし、私もそれを応援していきたいと考えています。



サークル
紹介

日本の大学で唯一の
パントマイムサークル

「パントマイム舞☆夢☆踏(マイムトウ)」

文=文化構想学部 2年
佐倉 和

プロの大道芸人として活躍するハッピー吉沢さんが在学中に旗揚げし、現在は年2回の公演や早稲田祭でのパフォーマンスを中心に活動しています。大道芸が好き、演劇経験がある、ダンスに興味があるなど、さまざまなサークル員によって構成されています。



2025年3月に学生会館で行った定期単独公演「マイムトウLIVE vol.33」



私の
ワセメン

取材・文・撮影=法学部 2年
金井 秀鴻



「和風カルボナーラ」930円(税込)。
写真は麺100g

おいしい裏メニューも
味わえるスパゲティ店

「OTTO (オット)」

馬場歩きの際に立ち寄りやすいスパゲティのお店。「和風カルボナーラ」を口に運ぶと、とろけるような甘さと、だしのやさしいコクが染み込む…！ 太くてもちもちした上質な麺は、絶妙なゆで加減も相まってベストな食感でお勧めです。

ぴー ぷる

取材・文・撮影=社会科学部 3年
米田 菜々美



「面白さでは同世代の誰にも負けない」という川手さん

面白さへの執念！「大人
気ラジオ番組」構成作家

学生にもかかわらず、人気ラジオ番組『オールナイトニッポン』の作家入りを果たした川手潤平さん。テレビ番組のリサーチャーとしての実力が認められ、また構成作家への熱意を伝え続けたことで徐々に業界の人脈もでき、仕事の機会をつかんでいきました。

キャンパスライフの情報は、ウェブサイト『早稲田ウィークリー』で随時チェックできます。

早稲田ウィークリー

「早稲田ウィークリー」は、早稲田大学学生部が発行する学生向けウェブマガジンです。授業期間中は毎日更新。学生生活に役立つ情報など多様なコンテンツを提供しています。こちらの誌面に登場したトピックスも、ウェブサイトにてさらに詳しく紹介しています。

※「早稲田ウィークリー」の記事を編集して掲載しています。また、記事内容は掲載時のものです。

「生と死」 答えのない問いにどう向き合うか

死生学と医療

【人間科学部設置科目】

生 生き方や死に方は選べるのか。その問いにどう向き合っていくかを考える授業が、笹月桃子先生の「死生学と医療」です。笹月先生は小児科医として約30年間病院に勤務しており、医療現場のリアルな事象を知れることが最大の魅力です。

講義を通して先生が繰り返し強調していたのは、「事実」と「価値観」を区別して考えることでした。印象に残っているのは、脳死について学んだ回です。驚いたのは、日本では「臓器提供を行う場合に限り脳死を人の

死とみなす」という点です。脳機能が全て失われているという事実と、それを“人の死”とみなすかどうかという価値観は別問題であり、分けて議論する姿勢が大切だと学びました。

死生学は私たち全員に関わる分野です。「生きること」「死にゆくこと」を考えることは、“今日をよりよく生きる”ことにもつながるかもしれません。

与えられたパッケージのまま、判断しない
パッケージの中を解体し、事実と価値を見極め、自分で考えてみる

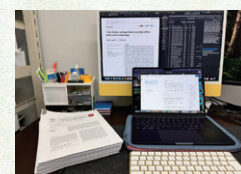


「事実」と「価値」を見極める

私 が専攻している管理会計は、企業の経営者や管理者が意思決定や組織のコントロールを行うために必要な情報を提供する企業内向けの会計です。指導教員である目時壮浩先生は、著書で「理論的には意思決定を支援する計算技法が高度化する一方で、現場では驚くほど単純なツールが使われていることが少なくない」と指摘されていました。私はこの言葉に、学問と実務の間にある溝と、そのはざまに潜む管理会計の本質的な面白さを感じました。管理会計とは「数字の背後にある人や組織の意思を理解する学問」なのだ気づいたのでした。

私の主な関心領域は、取引先との関係における“コントロールの問題”

です。管理会計はこれまで、主として自社内部をいかに効果的に管理するかに焦点を当て、意思決定を支援する情報やツールを提供してきました。しかし現在では一部機能を外部委託したり、複数の企業が連携して事業を進めることが一般化しており、組織の垣根を越えて支援する情報提供が重要となっています。私はこうした環境において、いかなるコントロールが企業間の信頼を損なうことなく協働を促すのかについて関心を持っています。



普段の研究風景

こんな授業! どんなんゼミ?

文=人間科学部 3年
北村 咲良/山口 羽夏



物事に向き合う際の新しい視点を得て、特にいのちについて、これまでより少しだけ解像度を上げて言葉にできるようになりました。

研究
まっしぐら!

文=大学院会計研究科
会計修士(専門職)課程 2年
河野 通大

数字の
奥に潜む
現場の意図



卒業式、入学式を挙行

式典の様子はインターネットでライブ配信



3月25、26日、戸山キャンパスの早稲田アリーナにて、2025年度学部卒業式、芸術学校卒業式および大学院学位授与式を執り行い、計10,893名が新たな門出を迎えました。来場者の安全確保と地域交通への影響を鑑み、式典への参加は卒業生、修了生のみ限定。保護者の皆さま向けには早稲田キャンパス内に同時中継会場を設けるとともに、ライブ配信を行いました。式典では、総代、博士の学位記授与に続き、田中愛治総長より卒業生へ式辞が送られました。田中総長は、式辞で「皆さんは卒業して社会に出たら、ご自身がやりたいと思う、遣り甲斐があると感じることに力を入れてください。(中略)卒業後も、時々は母校に帰ってきてください。その時には、今よりも輝いている早稲田で、今よりも輝いている皆さんとお会いしましょう」と激励しました。

4月1、2日には、早稲田アリーナにて2026年度学部・芸術学校・大学院入学式を執り行いました。2026年4月の学部入学者8,949名が、早稲田の杜での生活をスタートさせ、大学院入学者の2,983名が、さらに学問を追究し、学問の発展に貢献していくことを目指します。田中総長は式辞で「皆さん、早稲田で思う存分、勉強し、自分のやりたいと思う活動にも力を入れて、充実した学生生活を送ってください」と激励しました。



卒業式の様子は
こちらからご覧
いただけます。



入学式の様子は
こちらからご覧
いただけます。

ミラノ・コルティナ2026オリンピック・パラリンピック冬季大会で 在学生・卒業生が活躍

2026年2月にミラノ・コルティナで開催された第25回オリンピック冬季競技大会で、早稲田大学から在学生2名・卒業生10名が出場しました。スノーボード女子ハーフパイプでは、小野光希選手(スポーツ科学部4年)が銅メダルを獲得。女子フィギュアスケートでは、千葉百音選手(人間科学部通信教育課程)が4位に入賞しました。

同年3月に開催されたミラノ・コルティナ2026パラリンピック冬季競技大会では、在学生1名・卒業生1名が出場。村岡桃佳選手(大学院スポーツ科学研究科)が、アルペンスキー・女子スーパー大回転(座位)および女子大回転(座位)の2種目で、銀メダルを獲得。冬季パラリンピックでの個人通算獲得メダル数が11個となり、日本代表選手として最多となりました。



小野光希選手(左)
村岡桃佳選手(右)

写真提供=共同通信社

地域交流フォーラムを11会場で開催予定

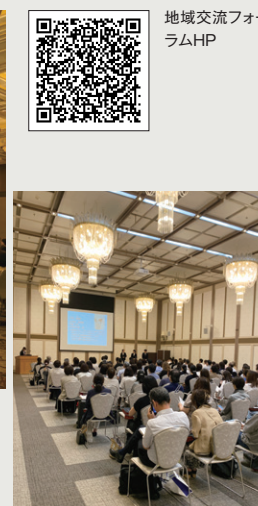
※保護者等の皆さまへの近況報告

主に1都3県(東京・埼玉・千葉・神奈川)以外にお住まいの保護者等の皆さまを対象とした地域交流フォーラムを開催します。本学における取り組みをご紹介しますほか、学生によるトークセッション、保護者等の方々同士の懇談会、職員との個別相談などを実施予定です。企画内容や時間帯などの詳細はウェブサイトにてご案内しております。

*ご参加には事前申し込みが必要となりますのでご注意ください。



2025年度開催時の様子



地域交流フォーラムHP

【2026年度 地域交流フォーラム日程・会場一覧】

地域	日程	会場
鹿児島	6/21(日)	ホテル・レクストン鹿児島
奈良	6/27(土)	ホテル リガール春日野
新潟	7/5(日)	アートホテル新潟駅前
広島	7/12(日)	グランドプリンスホテル広島
福岡	7/25(土)	福岡ガーデンパレス
北海道	9/6(日)	ホテルエミシア札幌
愛知	10/12(月・祝)	名古屋ガーデンパレス
石川	10/25(日)	KKRホテル金沢
宮城	10/31(土)	ホテルJALシティ仙台
大阪	11/15(日)	新大阪ワシントンホテルプラザ
愛媛	11/29(日)	ホテルマイステイズ松山

動画コンテンツで大学の取り組みをご紹介します

地域交流フォーラムにてご紹介している大学の取り組みなどを動画コンテンツにまとめています。保護者等の皆さまより多く寄せられるご質問をまとめたFAQもございます。右記QRコードよりご覧ください。



最新のニュースは、
早稲田大学
オフィシャルウェブサイトで!



本ページで紹介したニュースは、早稲田大学オフィシャルウェブサイトでご覧いただけます。



CAMPUS NOW
はウェブサイトでも
ご覧いただけます。

読者ウェブアンケート

皆さまのご意見を反映し、よりよい誌面していくためにアンケートにご協力ください。申請フォームはこちらのQRコードよりお願いします。



表紙写真



早稲田キャンパス
WASEDA Startup Lounge

アントレプレナーシップセンターの会員企業向けのラウンジ「WASEDA Startup Lounge」。打ち合わせスペースや作業ブースを備え、起業家たちの共用オフィスとして機能しています。イベントも開催され、学内外の関係者が交流し、新たなネットワークが育まれます。

NOW ON CAMPUS!

4月号の
気になるスポット



Uni. Shop & Café 125 @早稲田キャンパス

大隈記念講堂そばに建つオープンデッキのある早稲田大学オフィシャルグッズショップ&カフェ「Uni. Shop & Café 125」。ショップではワセダベアのめいぐるみやTシャツ、パーカー、マグカップなどバラエティ豊かなグッズを取り揃えています。今回WASEDA Labの記事中に登場した「海底湧水塩 うっしお」や、うっしおを使用した「あげ煎餅」も販売中。キャンパス来訪の際には、Uni. Shop & Café 125にもぜひお立ち寄りください。

[P18,19掲載]

WASEDA VISION 150

大隈重信が宣言した早稲田大学教旨を受け継ぎ、
本学は、創立150周年を迎える2032年の本学のあるべき姿を思い描き、
2012年に中長期計画“WASEDA VISION 150”を策定しました。
2018年以降、これをさらに進化させるべく新たなスローガンとして
「世界で輝くWASEDA」を掲げ、施策の検証と改善を繰り返しながら、不断の改革を実行しています。
詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。
<https://www.waseda.jp/inst/vision150/>



WASEDA University
早稲田大学

CAMPUS NOW

【キャンパスナウ】2026年4月20日発行 通号259号

※本誌記事・写真・図版を無断で転載等する事を禁じます。

発行 早稲田大学 広報室©
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104
E-mail kohno@list.waseda.jp

「CAMPUS NOW」
読者ウェブアンケートに
ご協力ください。



制作協力 株式会社KWC
次号は、2026年7月20日発行を予定しています。